

条件表現の地理的変異 : 方言文法の体系と多様性をめぐって

著者	三井 はるみ
雑誌名	日本語科学
巻	25
ページ	143-164
発行年	2009-04-24
URL	http://doi.org/10.15084/00002219

条件表現の地理的変異

——方言文法の体系と多様性をめぐって——

三井はるみ
(国立国語研究所)

キーワード

方言文法全国地図, 順接仮定条件表現, 体系の多様性, 津軽方言の「バ」, 佐賀方言の「ギー」

要旨

全国規模での文法事象の分布図である『方言文法全国地図』から、順接仮定の条件表現を取り上げ、方言文法体系の多様性を把握するための研究の端緒として、(1) 全国における分布状況の概観と結果の整理、(2) 青森県津軽方言の「バ」や佐賀方言の「ギー」といった、特定方言で観察されるそれぞれに特徴的な形式を中心とした体系記述の試み、を行った。(1) では、方言特有の形式は少なく、「バ」「タラ」「ト」「ナラ」など共通語と同じ形式が、方言によって用法の範囲を異にして分布している場合が目立つことを述べた。(2) では、共通語で効いている語用論的制約が働かない例、多くの方言で区別されている「なら」条件文の意味領域を、区別せずに同一の形式でカバーする例等を示した。最後に、条件表現および方言の文法体系の多様性の記述に向けての方向性について触れた。

1. 『方言文法全国地図』と方言文法研究

2006年に完結した国立国語研究所編『方言文法全国地図』¹は、研究の目的として「文法事象に関するこれまでの研究に地理的視野を与えること」および、次の6点への貢献を掲げていた(国立国語研究所1989:3)。

- (1) 各地の文法体系に関する研究を促進する。
- (2) 分布類型論、および、方言区画論に寄与する。
- (3) 文法事象の全国分布を言語地理学的に解明する。
- (4) 全国共通語の基盤とその成立過程を明らかにする。
- (5) 文献研究による日本語の歴史と方言分布との関連について考察する。
- (6) 方言社会、あるいは、方言地域出身者に関わる国語教育・日本語教育のあり方について検討する。

言語地図をツールとして用いる研究として代表的なのは、言語形式の地理的分布を分析の手がかりとする言語変化研究(狭義の言語地理学的研究, 上記の(3)), および分布研究((2))である。しかし当初から挙げられていたとおり、利用の範囲はそこにとどまらない。

特に、文法は緊密な体系性を有することから、記述研究を基盤的、中心的な研究法に据える

が、これに対しても言語地図は、特定の形式の地理的分布領域や意味範囲、語源や文法化のプロセス等について、情報を提供する((1))。さらに、複数の方言を対象として体系の多様性の説明を目指す対照研究・類型論的研究では、関連する複数の言語的特徴を地理的に俯瞰できる資料として、多くの手がかりや糸口を与えうる。ただし、意味のバリエーションをきめ細かく捉えるには、言語形式の地理的分布相を俯瞰することを第一目的とする言語地図だけでは、十分ではないことがままあり、その場合は、ターゲットとする事象について、要地にあたる方言を選び、分析枠を設定し、詳細な調査を行う必要がある。

本稿では、方言文法体系の多様性を明らかにする、という研究の方向性のもと、『方言文法全国地図』に記載されている表現分野から、条件表現(のうちの順接仮定条件表現)を取り上げて、全国における分布状況の把握と、特定方言での体系記述の試みを行ってみたい。

2. 取り扱う表現分野 —条件表現—

条件表現は、一方では、できごとを仮定的に予想しているのか(仮定)、実際に起こったできごとについて述べているのか(確定、事実)に分かれ、他方で、順当に予想される結果が起こった場合(順接)と、そうでない場合(逆接)に分かれて、全体で四つに分類されるのが一般的である(表1参照)。ここではこの4分類のうち、「順接仮定」の部分に焦点をあてる。共通語では、「ば」「たら」「と」「なら」が、順接の仮定条件文を構成する代表的な形式である。

条件表現、とりわけ、順接仮定表現は、現代語研究、歴史的研究とも非常に多くの研究の蓄積がある。これはまず第一に、共時的に多くの類義表現が存在し使い分けが問題となること、歴史的には確定の形式が仮定の意味を担うように変化し、かつ「ば」による表現から多様な形式による表現へという大きな変遷があったこと、といった興味深い事実が存在することによるものと思われる。方言の条件表現については、『方言文法全国地図』によって全国分布を把握することができるようになったほか、順接仮定条件表現を担う特定の形式の意味用法や、方言における体系について、特に近年研究が進みつつある(有田・江口2009;伊豆山2001;狩俣2007;真田1989;日高1999・2008;三井1999・2002b等)。

以下ではまず、方言の中で順接仮定条件表現形式のバリエーションがどの程度、どのように存在するのかということを、『方言文法全国地図』によって概観する。次にそこから、共通語と異なる体系を持つと予想される方言を二つ取り上げ、特徴的な形式の意味用法を中心に、共通語と対照しながら、その体系のありようを探る。最後に、方言の条件表現の体系の傾向について、大まかな見通しを述べる。

3. 順接仮定条件表現形式の全国的地域差

『方言文法全国地図』には、表1のとおり、条件表現に関して30項目の地図が収められている。うち順接仮定条件に関連するのは21項目であり、従属節末の品詞・動詞の活用の種類・肯否といった形態的な面と、仮定の意味や構文(前件と後件の関係、主節のモダリティ)等による違いを、ある程度カバーしている。ここではその中から次の7枚の地図によって、全国的な地理

表1 『方言文法全国地図』所収の条件表現関連項目

		仮定	確定(事実)	
順接	反事実	3-126 起きれば(よかった) <仮定形1> 3-127 任せれば(よかった) <仮定形1> 3-128 書けば(よかった) <仮定形1> 3-129 死ねば<仮定形1> 3-130 来れば(よかった) <仮定形1> 3-131 すれば(よかった) <仮定形1> 3-143 高ければ(よかった) <仮定形1> 4-153 行かなければ(よかった) <否定表現a>	原因理由 (必然)	1-33 降っているから(やめろ) <助詞> 1-35 だから(言ったじゃないか) <助詞> 1-37 子ども <u>なので</u> (わからなかった) <助詞>
	仮定	4-167 降れば(船は出ないだろう) <条件表現> 4-168 降ったら(おれは行かない) <条件表現> 4-169 行くと(だめになりそうだ) <条件表現> 3-116 来られると(困る) <受身形> 3-132 起きるなら(飯を作っておいてくれ) <仮定形2> 3-133 書くなら(きれいに書いてくれ) <仮定形2> 3-134 来るなら(電話をしてから来てくれ) <仮定形2> 3-135 するなら(早くしてくれ) <仮定形2> 3-144 高いなら(買わない) <仮定形2> 3-150 静かなら(住んでみたい) <仮定形2> 4-154 行かないなら(おれも行かない) <否定表現a> 5-206 行かなければならない<義務表現> 5-225 行ってはいけない<禁止表現>	事 実 (偶然)	4-170 行ったら(終わっていた) <条件表現>
逆接	4-171 行っ <u>た</u> って <u>だ</u> めだ<条件表現> 4-157 行かなくても(よい) <否定表現a>			1-38 寒いけれども(がまんしよう) <助詞> 1-39 だけど(行かなければならない) <助詞> 1-40 植えたのに(枯れてしまった) <助詞>

※ 数字は集-地図番号, <>内は『方言文法全国地図』での分野分類

的変異の様相を概観する。

128 図「きのう手紙を書けばよかった」(反事実条件文, 慣用的表現)

167 図「あした雨が降れば船は出ないだろう」(仮定条件文, 主節末: 推量表現)

168 図「あした雨が降たらおれは行かない」(仮定条件文, 主節末: 意志表現)

170 図「そこに行たらもう会は終わっていた」(事実的用法)

169 図「おまえが行くとその話はだめになりそうだ」(仮定条件文, 後件: 望ましくない事態)

225 図「そちへ行ってはいけない」(仮定条件文, 主節: 禁止表現, 慣用的表現)

133 図「手紙を書くなら字をきれいに書いてくれ」(仮定条件文・判断の仮定)

以下, 各図について語形を統合した略図を図1~図7に示し, それぞれに見られる語形と分布の状況を簡単に説明する²。

3.1. 128 図「きのう手紙を書けばよかった」(反事実条件文, 慣用的表現) (図1)

調査文は、前件は発話時点で成立しなかったことが確定している事態で、それが仮に成立していたと仮定し、後件でそれに対する評価を述べる文である。古代中央語の反実仮想にあたる表現で、反事実条件文だが、慣用的な表現でもある。

「カケバ」は東北から関東東部にかけてと九州南西部に分布し、また、その融合形である「カキヤー」が中部地方と中国・四国南西部・九州北東部に分布、そして、近畿から四国北東部にかけて「カイトラ」が分布する、という典型的な周圈的分布が認められる³。また、南東北の山形県・福島県と、熊本県北部など九州の一部には、「カクト」が、「カケバ」と併用が多いながら、集中的に分布している。

3.2. 167 図「あした雨が降れば船は出ないだろう」(仮定条件文, 主節末: 推量表現) (図2)

調査文は、前件の未実現の事態が未来において成立した場合を仮定し、後件でそれに伴って生じる事態を述べている仮定条件の文で、主節末は推量表現である。『方言文法全国地図』の項目の中では、典型的な仮定条件文である。この図の分布状況は、「ト」を用いる形式(「フルト」)が九州で減少している点を除き、反事実条件の128 図「書けば」(図1)とおおむね一致する。

3.3. 168 図「あした雨が降ったらおれは行かない」(仮定条件文, 主節末: 意志表現) (図3)

調査文は、前件の未実現の事態が未来において成立した場合を仮定し、後件でそれに伴って生じる事態を述べている仮定条件の文で、主節末は意志表現である。167 図「降れば」(図2)と同じ仮定条件の文だが、「たら」を用いた調査文を提示している。図2と比べると、「タラ」を用いる地域が広がり、「フレバ」「フリヤー」「フルト」などと併用されながら、ほぼ本土全体にわたっている点が注目される。ただし、東北北部と九州南西部などには「タラ」がほとんど現れない地域がある。「フレバ」「フリヤー」「フルト」の分布地域は、167 図とおおむね同様である。

3.4. 170 図「そこに行ったらもう会は終わっていた」(事実的用法) (図4)

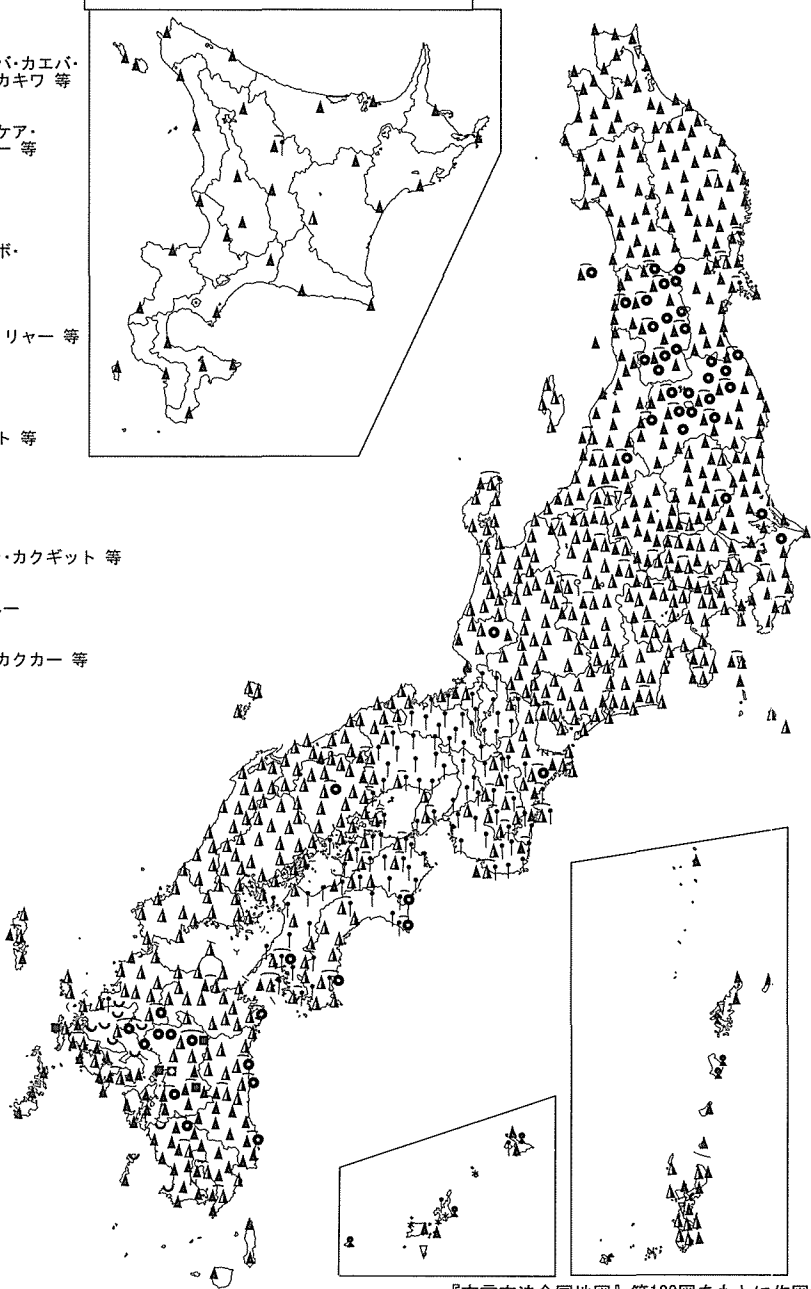
168 図「降ったら」(図3)と同じく「たら」による調査文だが、事実的用法で、前件後件ともにすでに成立した一回的なできごとである。前件の動作の結果、後件の状態に気づいたことを表す。東北北部と琉球を除いて、全国的にはほぼ「イッタラ」のみが分布している。東北北部に分布するのは、「イッタツケ」「イッタバ」で、いずれも仮定条件文の「降ったら」の地図には全く、あるいはほとんど現れておらず、事実的用法専用の形式である。

また、「行く」の過去形「行った」の「已然形+バ」にあたる「イッタレバ」が見られる。具体的な語形は、「イッタレバ」(東北と九州南西部)、その融合形「イッタリヤ」(九州南西部)、「ンジャレー」(沖縄本島南部)等である(「ンジャレー」は、「行く」にあたる動詞の過去形「ンジャン」の「已然形+バ」の融合形)。この形は仮定条件の168 図「降ったら」(図3)にはほとんど現れない。中央語史上、仮定条件の「たら」は、「たらば」の「ば」が脱落して生じ、事実的用法の「たら」は、「たれば」が「たりゃ」を経て生じた、とされる推移(小林1996: 第8章)と対応する

きのう手紙を書けばよかった

(反事実条件文・慣用的表現)

- ▲ カケバ類
カケバ・カゲバ・カヘバ・カエバ・
カキバ・ハキバドゥ・カキワ 等
- △ カキヤー類
カキヤー・カキヤ・カケア・
カカー・カケー・ハケー 等
- ▽ カカバ
カカバ・ハキヤバ
- ▽ カクバ類
カクバ・カグバ・カクボ・
カークワ
- ↑ カイタラ類
カイタラ・ケータラ・
カキッター・カッターリヤ 等
- ♀ カイタラバ類
ケータラバ
- カクト類
カクト・カグト・カクト 等
- カクナラ
- カクンナラ
- ∪ カクギー類
カクギー・カクギリヤ・カクギット 等
- ✕ カキネー類
ハキネー・カツィーネー
- ✱ カキティカー類
カチカ・カキシカー・カクカー 等
- * その他
- ∞ 無回答



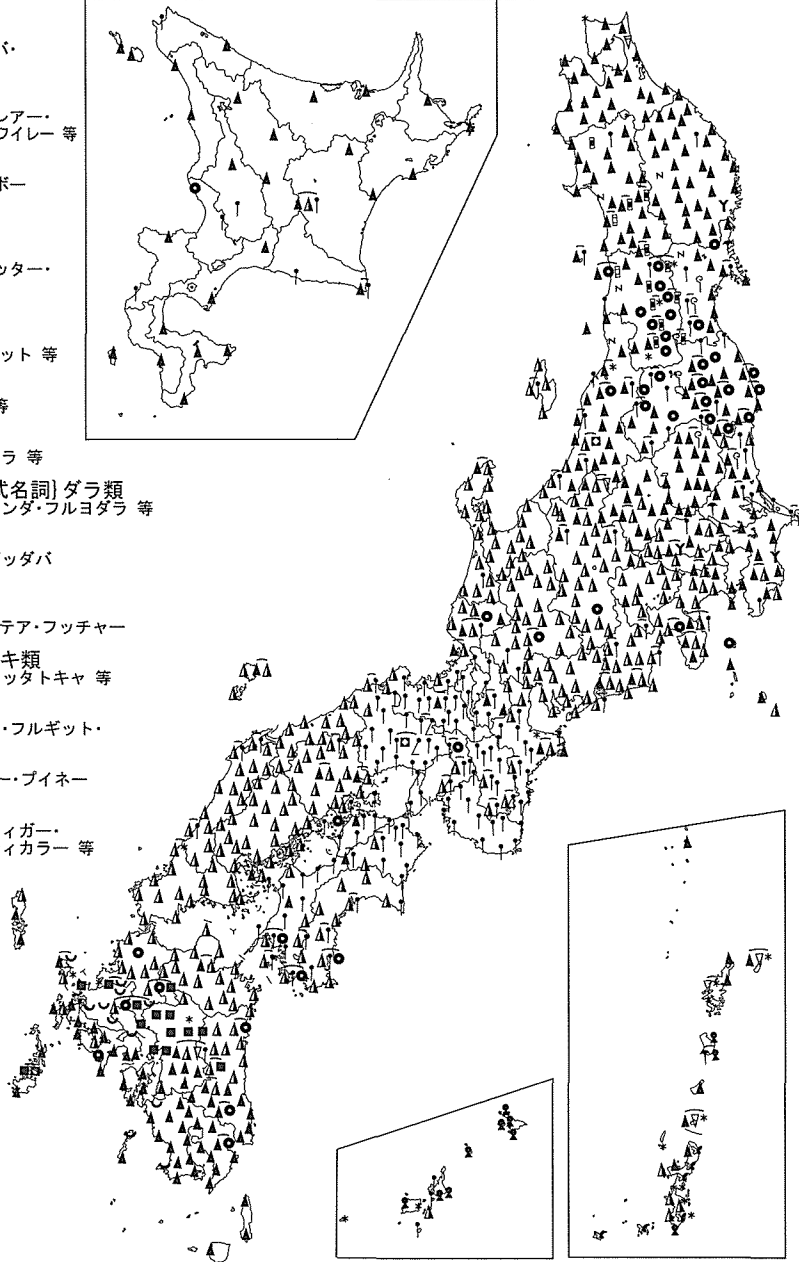
『方言文法全国地図』第128図をもとに作図

図1 きのう手紙を書けばよかった (反事実条件文)

あした雨が降れば船は出ないだろう

(仮定条件文・主節末:推量表現)

- ▲ フレバ類
フレバ・フェバ・プリバ・
フィバ・フリワ 等
- △ フリヤー類
フリヤー・フリヤ・フレアー・
フラー・フヤー・フレー・ワイレー 等
- ▽ フラバ類
フラバ・ブラバ・ブラボー
- ∇ フルバ
- ↑ フッタラ類
フッタラ・フタラ・プッター・
ツフチャラ 等
- ♀ フツタラバ
- フルト類 フルト・フット 等
- フルナラ類
フルナラ・フンナラ 等
- フルンナラ類
フルンナラ・フットナラ 等
- ⊠ フル〔準体助詞/形式名詞〕ダラ類
フルゴッタラ・フツコンダ・フルヨダラ 等
- ⊡ フルンダバ類
フルゴッタバ・フルゴッタバ
- ∟ フルンヤッタラ
- Υ フツチャー類 フツテア・フツチャー
- ↑ フルトキ・フタトキ類
フリユントウキヤ・フタトキヤ 等
- ∪ フッキー類
フッキー・フリギリヤ・フルギット・
フツタギリ
- ⊘ ファイナー類 ファイナー・ブイネー
- ⊠ フーティカー類
フティカー・フズイティガー・
フーズィッカー・フティカラー 等
- * その他
- △ 無回答



『方言文法全国地図』第167図をもとに作図

図2 あした雨が降れば船は出ないだろう (仮定条件文)

あした雨が降ったらおれは行かない

(仮定条件文・主節末・意志表現)

- ▲ フレバ類
フレバ・フェバ・フリバ・
フリバ・フリボ・フイバヤ 等
- △ フリヤー類
フリヤー・フリヤ・フレアー・
フラー・フヤー・プレー・フイレー 等
- ▽ フラバ類
フラバ・フラバ・フラバヤ・フラボ 等
- ▼ フルバ
- ↑ フッター類
フッター・フタラ・フッター・
フチャラ 等
- ♀ フッターバ類
フッターバ・フッターバ 等
- ┌ フッタバ
- Υ フッターレバ類
フッターリヤ・フッターリヤ
- フルト類 フルト・フット 等
- フルナラ類 フルナラ・フナラ 等
- ⊠ フル〔準体助詞/形式名詞〕ダラ類
フルゴッタラ・フツコンダラ・フルヨダラ 等
- ⊡ フルンダバ類
フルゴッタバ・フルエンタバ
- ∟ フルンヤッタラ類 フルンヤッタラ・フルガダッタラ
- Υ フツチャー類
フツチャー・フチャ・フンチャ 等
- ↑ フルトキ・フッタトキ類
フットキヤ・フッタトキヤ 等
- ∪ フツギー類
フツギー・フイギ・フツギニヤ・フツタイギ 等
- ✕ フィネー類 フィネー・フイネー
- ⊠ フーティカー類
フティカー・フーティガー・
フズイカー・
フズイッカー・
フンカ・フーカ 等
- * その他
- z 無回答



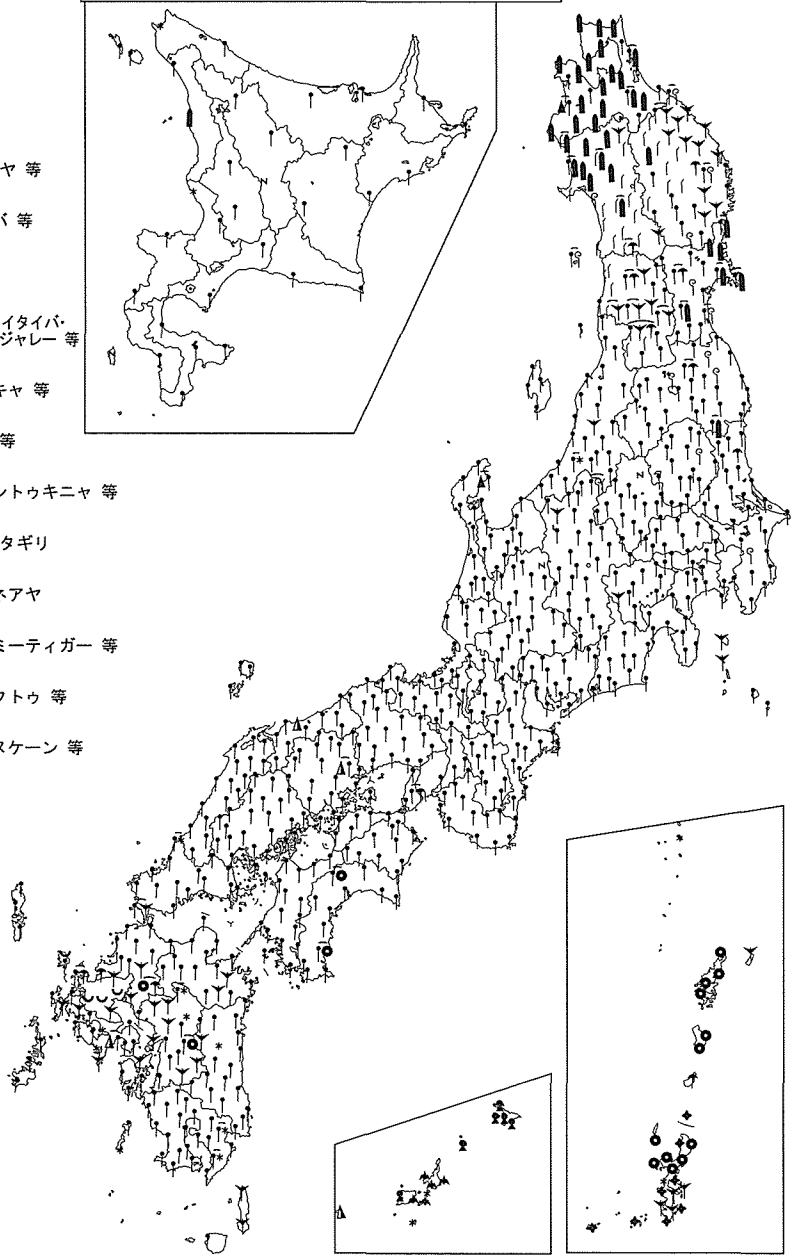
『方言文法全国地図』第168図をもとに作図

図3 あした雨が降ったらおれは行かない (仮定条件文)

そこに行ったらもう会は終わっていた

(事実的用法・発見)

- ▲ イケバ類
イケバ・エゲバ
- △ イキヤー類
イキヤー・ヒリヤー・
イターチミリヤー
- † イッタラ類
イッタラ・イタラ・イタヤ 等
- ‡ イッタラバ類
イッタラバ・イッターバ 等
- ┌ イッタバ類
イッタバ・エタバ 等
- └ イッタレバ類
イッタレバ・エツテアーバ・イタイバ・
イッタリヤ・イジャリバ・バンジャレー 等
- ▮ イッタツケ類
イッタツケ・イッタツキヤ 等
- イクト類
イクト・イジャートウ 等
- ↑ イッタトキ類
イッタトキヤ・イジャントウキニヤ 等
- ∪ イタギー類
イタギー・イタイギ・イタギリ
- ⊖ イカンネーヤ類
イカンネーヤ・イカンネアヤ
- ⊗ イキティカー類
イキツィカー・イツチミーティガー 等
- ✦ イジャクトウ類
イジャクトウ・ンジャクトウ 等
- ▲ パルンケンヤ類
パルンケンヤー・ハルヌケン 等
- * その他
- △ 無回答



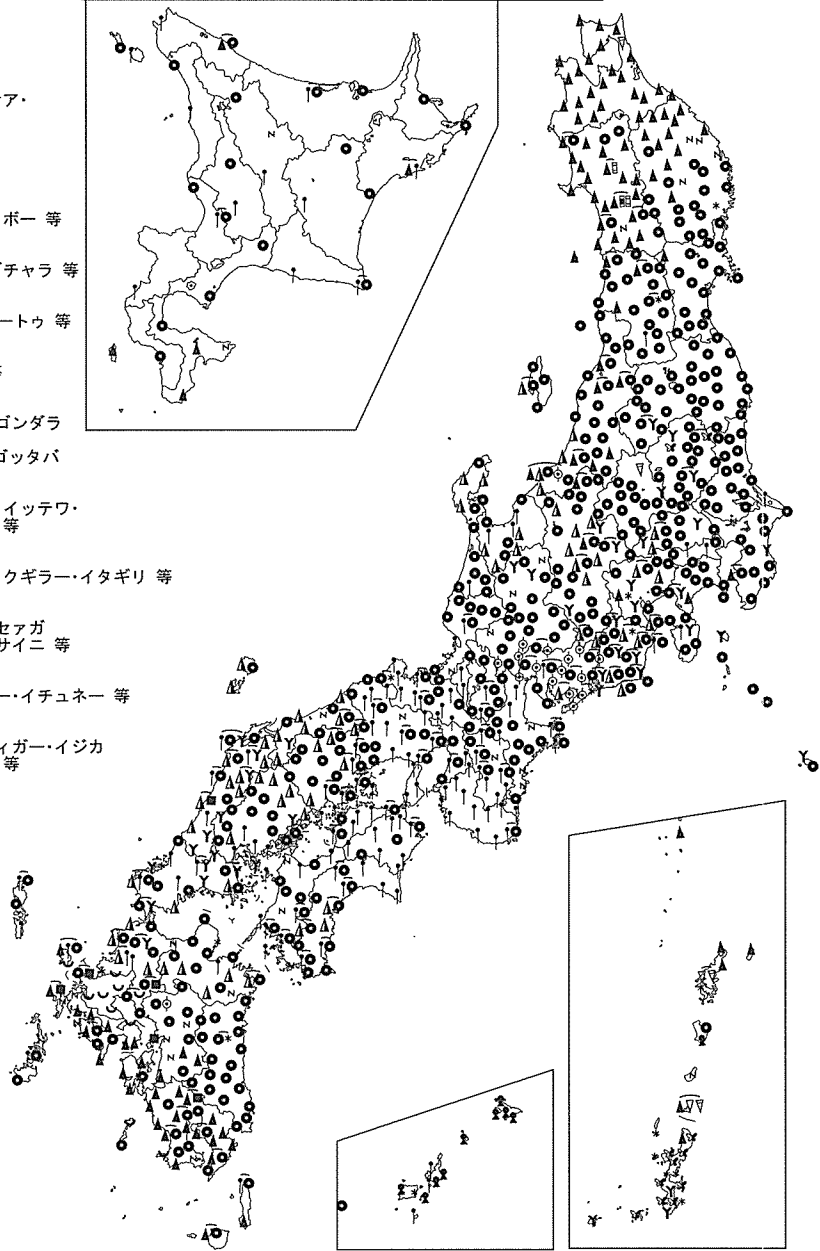
『方言文法全国地図』第170図をもとに作図

図4 そこに行ったらもう会は終わっていた (事実的用法)

おまえが行くとその話はだめになりそうだ

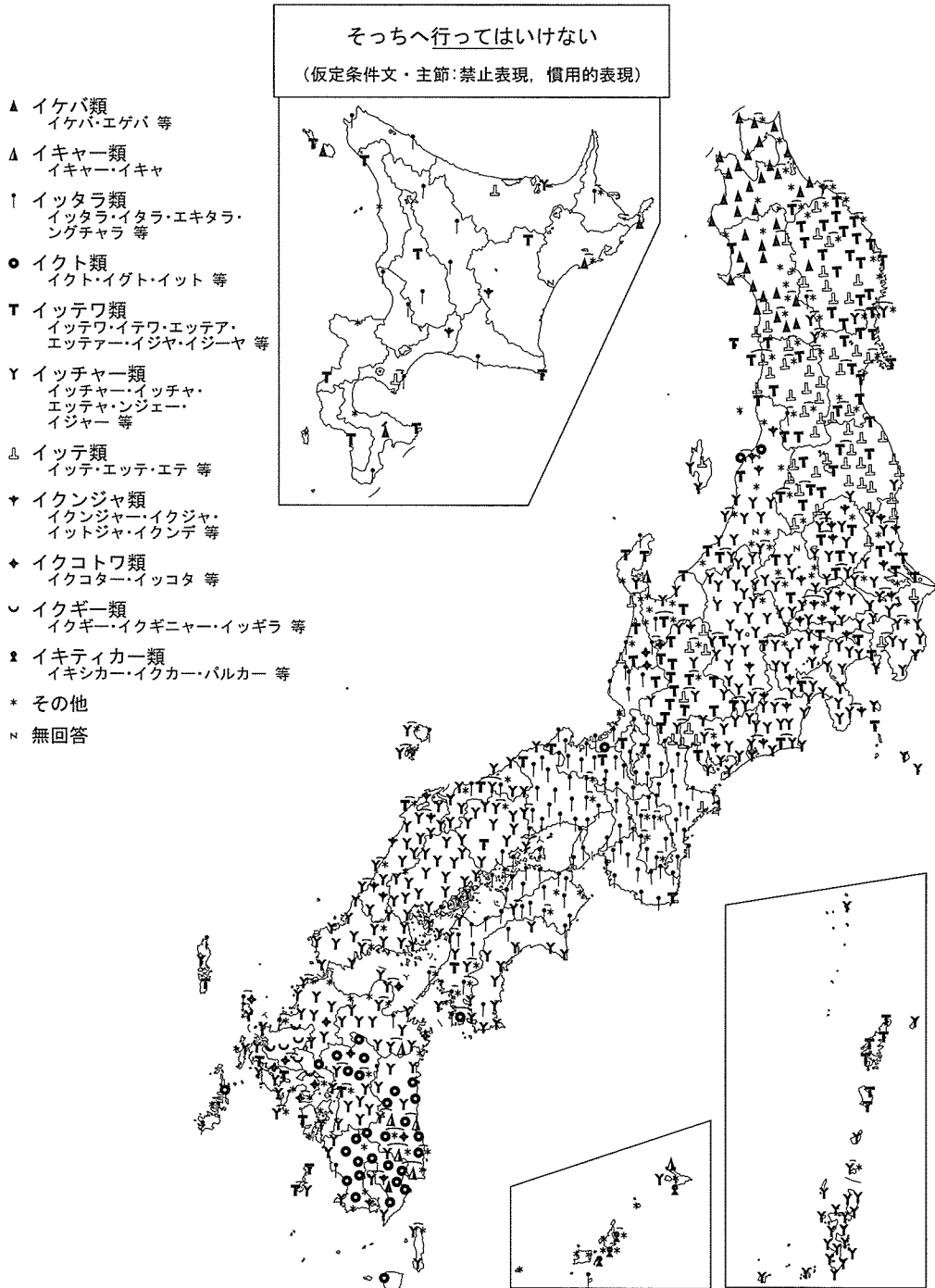
(仮定条件文・後件:望ましくない事態)

- ▲ イケバ類
イケバ・イケバ 等
- △ イキヤー類
イキヤー・イキヤ・イケア・
イカー・イチュー 等
- ▽ イカバ類
イキャホー・イカバヤ
- ▽ イクバ類
エグバ・イク^o・バイクホー 等
- ↑ イッター類
イッター・イタラ・ングチャラ 等
- イクト類
イクト・イグト・イキュートウ 等
- イクナラ類
イクナラ・イッナラ 等
- ⊠ イクンダラ類
イグゴッタラ・イッタゴンダラ
- ⊡ イクンダバ類 イグゴッタバ
- Υ イッチャー類
イッチャー・イッチャ・イツテワ・
イキチャー・ンジュー 等
- ∪ イクギー類
イクギー・イッギー・イクギラー・イタギリ 等
- ⊕ イクトサイガ類
イクトサイガ・イクトセアガ
イクトシャガ・イクトサイニ 等
- ⊗ イチーネー類
イチーネー・イクンネー・イチューネー 等
- ⊠ イキティカー類
イキティカー・イッティガー・イジカ
ハルカー・バルッカー 等
- * その他
- ∅ 無回答



『方言文法全国地図』第169図をもとに作図

図5 おまえが行くとその話はだめになりそうだ (仮定条件文, 後件:望ましくない事態)



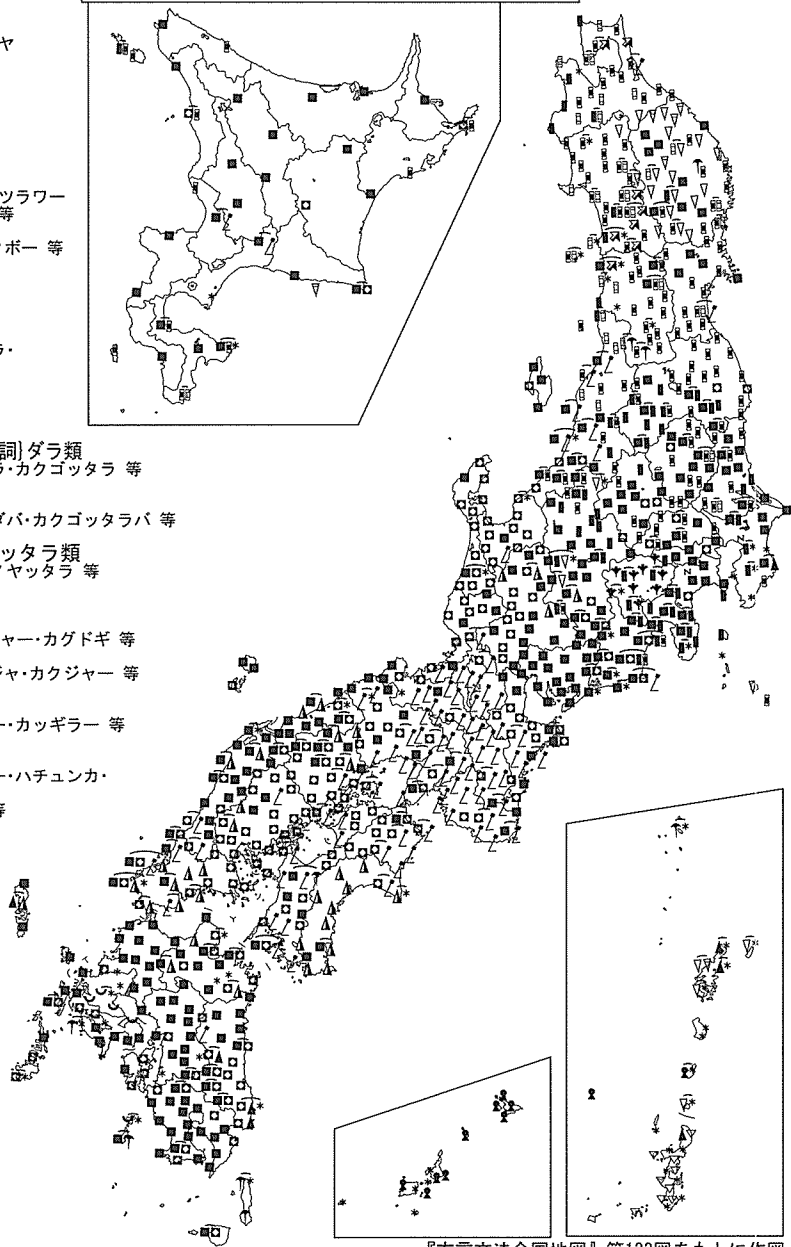
『方言文法全国地図』第225図をもとに作図

図6 そっちへ行ってはいけない (仮定条件文, 主節:禁止表現)

手紙を書くなら字をきれいに書いてくれ

(仮定条件文・判断の仮定)

- ▲ カケバ類
カケバ・カキバ・ハキバヤ
- ▲ カキヤー類
カキヤー・カキヤ
- ▽ カカバ類
カカバ・カガバ 等
- ▽ カクラバ類
ハクラバ・カツラバ・カツラワー
カツラー・カチュラー 等
- ▽ カクバ類 カクバ・カクポー 等
- カクナラ類
カクナラ・カツナラ 等
- カクンナラ類
カクンナラ・カクガナラ・
カツナラ 等
- カクダラ類
カクダラ・カフダラ 等
- カク〔準体助詞/形式名詞〕ダラ類
カクンダラ・カクアダラ・カクゴツタラ 等
- カクンダ(ラ)バ類
カクンダラバ・カクアダバ・カクゴツタラバ 等
- ∟ カクン〔ダ/ジャ/ヤ〕ツタラ類
カクンダツタラ・カクノヤツタラ 等
- ✕ カクカラ類 カクカラ
- ↑ カクトキ類 カクトキヤー・カグドギ 等
- ✚ カクジャー類 カクジャ・カクジャー 等
- ∪ カクギー類
カクギー・カクギニヤー・カクギラー 等
- ✚ カキティカー類
カキティカー・カキカー・ハチュンカ・
カカディヤティカー・
カーディヤティガー 等
- * その他
- ∞ 無回答



『方言文法全国地図』第133図をもとに作図

図7 手紙を書くなら字をきれいに書いてくれ (仮定条件文・判断の仮定)

分布である。

3.5. 169 図「おまえが行くとその話はだめになりそうだ」(仮定条件文, 後件: 望ましくない事態) (図5)

調査文は、仮定条件文で、後件が話し手にとって望ましくない事態と捉えられる内容である。文全体は、懸念があるので避けた方がよい、といった伝達の意味を担っている。全国的に「イクト」が分布する中で、東北北部と九州南西部には「イケバ」が見られる。また、近畿から四国北東部にかけては、「イクト」との併用が多いが、「イッタラ」がまとまって分布している。なお、方言特有語形の「トサイガ」がこの図のみに現れ、岐阜県・愛知県一帯と熊本県に分布する。

3.6. 225 図「そっちへ行ってはいけない」(仮定条件文, 主節: 禁止表現, 慣用的表現) (図6)

調査文は仮定条件文で、主節が禁止表現である。近畿から四国北東部にかけて「イッタラ」、それをさむように、東北・関東・中部と、中国・四国南西部・九州北東部に「イッテワ」とその融合形の「イッチャー」が分布し、周圍の分布をなしている。なお、「イッテワ」は主に東北に分布するが、東北では全般に副助詞「は」が用いられにくいいため、むしろ「イッテ」が優勢である。また、東北北部には「イケバ」、九州南部には「イクト」がまとまって見られる。

3.7. 133 図「手紙を書くなら字をきれいに書いてくれ」(仮定条件文・判断の仮定) (図7)

調査文は、相手の意向を受けるなどして、前件の事態が成立することが真であると仮定する判断の仮定条件文で、主節末は依頼表現である。「カクナラ」「カクンナラ」は、関東・中部と四国・九州に分布する。東北には、「ナラ」と同じく断定の助動詞に由来する「ダラ」「ダバ」と各地特有の準体助詞・形式名詞を用いた、「カクゴツタラ」(「カク」{準体助詞/形式名詞}「ダラ類」)、「カグアダバ」(「カクンダ(ラ)バ類」)等の多様な形が見られる。近畿は「カクンヤッタラ」で、「タラ」による形式とそれ以外とが、やはり周圍の分布をなしている。

また、古代中央語の代表的仮定表現形式である「未然形+バ」の形である「カカバ」が現れる。岩手県にまとまって分布するほか、長野県秋山郷・開田・奈川、伊豆諸島三宅島・八丈島、鹿児島県喜界島・奄美大島宇検村(語形は「カカバヤ」)・与論島(語形は「カカポー」)に見られる。また、沖縄本島に多い「カクラバ」(那覇市首里では「カチュラー」)は、融合語幹(主動詞が「いる」にあたる動詞「ツウン」と複合した語幹)の「未然形+ば」にあたる形で、基本語幹の「未然形+ば」にあたる「カカバ」とともに、意味の違いを持って使われているようである(国立国語研究所 1963: 69-70, 津波古敏子 1997: 380)。

次に、岩手県盛岡市方言の例文を挙げる⁴。

① エッコ タデラバ ヒッコ アダルドゴ インダ。

(家を建てるなら日の当たる所がいい。)(盛岡市・1920生・女性)

ただし、古代語の「未然形+バ」が、広く仮定条件全般を担う形式であったのに対し、現代方言の「未然形+バ」は、133 図のような、共通語の「なら」の意味にあたる、判断の仮定を表す

用法に偏る傾向がある⁵。なお、図7で東北北部に（原因・理由ではなく）仮定条件を表す「カクカラ」という形があるが、この「カラ」も、形容詞の未然形語尾（「高カラバ」等の「カラ」）が独立した形式と見られる。

3.8. まとめ

以上の図に見られる語形と分布を、きわめて概略的にまとめると、表2のようになる。また、地点数は少ないがある程度まとまった分布をなす語形を表注として示す。琉球方言は地域差が大きいが、代表地点として、那覇市首里の回答を挙げた。各調査文ごとの1行目は、提示した共通語形と同じ形式、2行目以下はそれと異なる形式である。

表2 順接仮定条件表現形式の全国的地域差

地域 調査文	東北北部	東南北部	関東・ 中部	近畿・ 四国北東部	中国・ 四国南西部・ 九州北東部	九州南西部	沖縄本島 首里
書けば	カケバ	カケバ カクト	カケバ カキヤー	カイタラ	カキヤー ※1	カケバ	カケー
降れば	フレバ	フレバ フルト	フレバ フリヤー	フッタラ	フリヤー ※2	フレバ	フレー
降ったら	フッタラ フレバ	フッタラ フルト	フッタラ フリヤー	フッタラ	フッタラ フリヤー ※3	フレバ	フィネー
行くと	イケバ	イクト	イクト ※4	イクト イッタラ	イクト ※5	イクト イケバ	イチーネー
行ったら	イッタッケ イッタバ ※6	イッタラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ ※7	イッタラ ※8	ンジャレー
行っでは	イケバ	イッテ	イッチャー	イッタラ	イッチャー ※9	イクト	ンジェー
書くなら →(Nは 準体助詞・ 形式名詞	カクNダラ カカバ ※10	カクNダラ ※11	カクナラ カクNナラ カクダラ カクNダラ ※12	カクNヤッタラ	カクナラ カクNナラ ※13	カクナラ カクNナラ	カチュラー

※1カクト, カクナラ, カクギー (佐賀等, 以下「ギー」はすべて同) ※2フルナラ, フッギー ※3フルナラ, フッギー ※4イキヤー, イクトサイガ(愛知等) ※5イクギー ※6イッタレバ ※7イタギー ※8イッタレバ ※9イクギー ※10カクカラ ※11カクトキ(山形) ※12カクジャー (山梨) ※13カキヤー (高知等), カクギー

図1～図7および表2から、中部(愛知県・岐阜県)等の「トサイガ」、九州(佐賀県等)の「ギー」などがあるものの、全国的に見ても、方言特有の形式はあまり多くないと言える。むしろ目立つのは、共通語で類義関係にある「バ」「ト」「タラ」「ナラ」などの形式が、1枚の地図、つまり、同一の調査文に対する回答の中に、それぞれ固有の地理的領域を持って分布している点である。ここから、共通語と同じ形式でも、方言によって、カバーする用法の範囲や、構文的・意味的制限のありようが異なることがうかがわれる。さらに地域別に見ると、東北北部では「バ」が、近

畿から四国にかけての地域では「タラ」が、それぞれ広い用法で用いられているなど、各地方言の体系の一面がうかがわれる。

そこで次に、共通語と異なった体系を持つと目される方言を二つ取り上げ、特徴的な形式の意味用法を中心に、それぞれの体系のありようの一端を探る。

4. 青森県津軽方言の順接仮定条件表現

個別方言における仮定条件表現の体系の一例として、「バ」が広く用いられる東北北部方言の中から、青森県津軽方言を取り上げる⁶。この方言の順接仮定条件形式には「バ」「タラ」、共通語の「なら」に対応する「ダバ」「ダラ」、もっぱら事実的用法で用いられる「タキヤ」がある。「ト」は現れない。以下では、この方言の特徴である「バ」の用法を中心に、「タラ」との使い分けに触れながら見ていく。

「バ」は、仮定条件文、反事実条件文、一般条件文、反復習慣用法で用いられるという点では共通語の「ば」と同様である。「タラ」については、使うかどうか確かめると、「言ってもおかしくはないが、方言らしくない」「通じるけれども使わない」のようなコメントが得られる（このような形式にここでは△を付した）。例文は、浪岡町生育青森市在住の1931年生の女性による。

② アシ タイフ {クレバ/△キタラ} ガッコ ヤスミニ ナルベナー。

(明日台風が来れば、学校は休みになるだろうな。)[仮定条件文] ≒ 167 図 (図2)

③ モット ハヤグ {オギレバ/△オキタラ} エシテアッタ。(もっと早く起きればよかった。)

[反事実条件文] ≒ 128 図 (図1)

④ イチサ イチ {タヘバ/△タシタラ} ニニ ナル。ホッタラモノモ シラネアノガ。

(1に1を足せば2になる。そんなことも知らないのか。)[一般条件文]

⑤ アノヒトノ エサ {エゲバ/△エタラ} ムッタド ゴツツォニナルンダイノー

(あの人の家に行くと、いつもごちそうになる。)[反復習慣用法]

一方、後件が「反期待性」を持つと見なされる内容で、文全体が「回避の必要性」や「禁止」といった伝達の意味を担う場合、共通語では「ば」が使えず、「たら」「と」「ては」が使われる(蓮沼 1987)が、津軽方言では「バ」が次のようにごく普通に、むしろ最も適格な表現として使われる。

⑥ [お前が行くのか? 心配だなあ、という気持ちで]

オメ {エゲバ/△エタラ} ハナシ キマネジャ。(お前が行くと話しが決まらないよ)

≒ 169 図 (図5)

⑦ ソツタラダ クレアトコデ ホン {ヨメバ/△ヨンダラ} マナグ ワルグ スヨー。

(そんな暗いところで本を読んだら、目を悪くするよ。)

⑧ [子どもに注意を与えて]

ソッチサ エゲバ マネヨ。(そっちへ行っちゃいけないよ。) = 225 図 (図6)

この点に関して、津軽方言では、共通語で働いている語用論的な制約が効いていないと言える。

共通語で「ば」が使えない場合としてはもう一つ、前件が意志的動作で文末が命令、依頼など

のはたらきかけの表現のときがある。この場合は、津軽方言でも、「バ」が使われず、「タラ」が使われる。この点に関しては、共通語と同様の文末制限がある。

⑨ ママ クタラ (×ケバ) ハ ミガケ。(ご飯を食べたら歯をみがけ。)

⑩ エギサ チダラ (×チゲバ) デンワ シテケへ。(駅に着いたら電話してくれ。)

しかし、このような制限がある場合を除いては、「バ」が優先的に使われる。仮定的な意味が含まれている条件文には基本的に「バ」を使い、「タラ」は、前件の完了後後件の事態が生起する、という継起的な意味が明らかな場合に限って用いる、という基本的な使い分けがうかがわれる。

なお、共通語の「たら」は、既に実現した一回限りの事態について言う事実的用法を持つが、津軽方言ではこの用法は基本的に「タキヤ」という形式で表される。この点を含めて、津軽方言の「タラ」の用法は、共通語の「たら」より限られている。

⑪ ジカン マチガテ {△エツタラ/エツタキヤ} オワテタジャ。

(時間を間違えて行ったら、終わっていたよ。) ≒ 170 図 (図4)

以上のように、津軽方言では、共通語と対照して、「バ」の用法が広く、「タラ」の使用が限られる傾向にある⁷。

5. 佐賀方言の順接仮定条件表現

次にもう一つの例として、全国的にも数少ない方言特有形式「ギー」を用いる佐賀方言を取り上げる⁸。県内でも地域差があるが、「ギー」があまり用いられない北部の唐津地域を除き、主たる順接仮定条件形式は「ギー」と「ナイバ」である。「バ」は、当為表現、並列・列挙用法といった慣用的用法に限って用いられる(例:行カンバナラン(行かなければならない))。「ト」「タラ」は現れない。その他、事実的用法専用の「タイバ」がある。以下では、この方言の特徴である「ギー」の用法を中心に見ていく⁹。

「ギー」は、主として佐賀県とその隣接地域のみに見られる形式である。用法には地域差があるが、最も特徴的なのは、共通語の「ば」「と」「たら」「ては」の用法に加え、「なら」の領域までカバーしている点である(図1～図7参照)。

ここでは、「ギー」が最も広い用法で用いられる地点の一つである、佐賀県鹿島市古枝字下古枝の、『方言文法全国地図』(GAJ)における回答を中心に挙げる¹⁰。『方言文法全国地図』で調査を行っていない用法については、『方言文法全国地図』準備調査(preGAJ, 1977年実施)の鹿島市山浦大殿分の回答、国立国語研究所編(2008)『方言談話データベース日本のふるさとことば集成19』(JDD)所収の佐賀市久保泉町上和泉草場の談話(1978収録)によって補う。(GAJ, preGAJの用例は、片仮名部分が話者の回答、それ以外は調査文のまま。「preGAJ」の直後の数字は質問番号、「JDD」の直後の数字とアルファベットは発話番号。地名の後の数字とアルファベットは話者の生年と性別を示す)

「ギー」は広く、仮定条件文、反事実条件文、一般条件文、反復習慣用法にわたって用いられる。

⑫ あした雨が フグギニャー/フグギナイ (降れば) 船は出ないだろう。〔仮定条件文〕

(GAJ167 図 = 図 2, 鹿島市 1920m)

- ⑬ きのう手紙を カクギ (書けば) よかった。〔反事実条件文〕

(GAJ128 図 = 図 1, 鹿島市 1920m)

- ⑭ コノ デクツギ モー シゴター デケンモン。〔一般条件文〕

((お嫁さんに) 子どもができれば, もう仕事はできないもの。)(JDD30C, 佐賀市 1895m)

- ⑮ アーワイガチャー イクギー / イクギニャー (あの人の家に 行くと) いつも
ごちそうしてくれる。〔反復習慣用法〕(preGAJ152, 鹿島市 1917m)

後件が「反期待性」を持ち, 文全体が「回避の必要性」「禁止」の意味を担う文や, 前件が意志的動作で文末が命令, 依頼などのはたらきかけの表現のとき (いずれも共通語では「ば」が使えない) でも使われる。

- ⑯ おまえが イクギタウ (行くと) その話はだめになりそうだ。

(GAJ169 図 = 図 5, 鹿島市 1920m)

- ⑰ そっちへ イッギ ユーナカ (行っては いけない)。(GAJ225 図 = 図 6, 鹿島市 1920m)

- ⑱ マチー イッギー / イッギニャー (町に 行ったら) 酒を買って来てくれ。

(preGAJ152, 鹿島市 1917m)

事実的用法では, 「タギー」の形で用いられる。

- ⑲ ワイガ イタギー (私が 行ったら) もう会は終わっていた。

(preGAJ153 = GAJ170 = 図 4, 鹿島市 1917m)

以上のように, 「ギー」は, 共通語の「ば」「と」「たら」「ては」の用法を広く覆っている。そしてさらにそれに加え, 次のように, 共通語の「なら」による仮定条件文でも用いられる。

- ⑳ 手紙を カクギニャー (書くなら) 字をきれいに書いてくれ。

(GAJ133 図 = 図 7, 鹿島市 1920m)

つまり, 「ギー」はここまで見てきたすべてのタイプの仮定条件文で使うことができる。

共通語の「なら」による条件文は, 前件の事態を仮に真であると仮定し, 主節で話者の判断・態度を表明する, といった独自の意味を持つとされる (益岡 1993 等)。形に現れる点としては, 一般の条件文では, 前件と後件の事態の時間的前後関係が, 前件の後に後件が生起する, という順序であるのに対し, 「なら」による条件文では, 前件と後件が同時に生起する場合 (㉔) や, 前件に先立って後件が生起する場合も表すことができる。この場合, 共通語では「ば」「たら」「と」「ては」は使えず, 「なら」のみが使用可能である。

表 2 から読み取れるように, 共通語だけでなく, 全国の多くの方言で, 共通語の「ば」「たら」「と」「ては」が担う意味領域については, それぞれの方言ごとに区分の違いはあるものの, その間で共通の形式が現れることがある。しかし, 「なら」が表す意味領域についてだけは, いずれの方言においても, それらとは違った形式が当てられている (近畿・四国北東部方言では「タラ」が広く用いられるが, 「なら」に対応して現れるのは「のだ」相当形式を含んだ形であり, 他とは異なっている)。このことは, 「なら」による仮定条件文の持つ文法的性質と関わるものと見られ, それ自体興味深い, 佐賀方言の「ギー」はその枠組みを外れることになり, 条件表現

の体系を考える上で注目される。

ところで「ギー」の用法には、県内でも地域差・年齢差がある。鹿島市を含む佐賀西部地域（および隣接する島原半島北部）では広い用法で用いられるが、佐賀市などの佐賀東部地域（および隣接する福岡県筑後地方）では用法に限られる。北部の唐津地域では形式自体があまり用いられない。『方言文法全国地図』の調査によると、「なら」の意味領域まで「ギー」が使われるのは佐賀西部地域（多久市、鹿島市、伊万里市）であり、佐賀東部地域（佐賀市、神埼郡三瀬村）では、この場合「ギー」は用いられず、次のように「ナイバ」が用いられる。

㉑ 手紙を カクナイバ（書くなら） 字をきれいに書いてくれ。

（GAJ133 図、佐賀市鍋島町蛸久 1916m）

しかし現在の若年層では、佐賀東部方言でも、この場合に「ギー」が使用されるようになってきており、話者にも「ナイバ」は古く、「ギー」が新しい形式であるという意識があるという¹¹。

㉒ テガミオ カクギー キレーニ カカンネ。（佐賀市、20代 m）

ここから、「ギー」の発生と展開について、地理的には、佐賀県西部地域で発生し、東部地域に広がったこと、意味的には、「ば」「たら」「と」「ては」の領域を担うものとして発生し、「なら」の領域にまで広がったこと、その変化は比較的最近のものであること、が推測される。「ギー」の語源は、限定の副助詞「きり」であるとされるが、そのことを含め、この形式の発生と展開の経緯について明らかにすることは、方言の条件表現の体系の多様性を考える上での一つのポイントになるものと思われる。

6. 方言の順接仮定条件表現に見られる傾向

以上、全国概観と二つの個別方言の例を見てきた。ここでそれらを含め、方言の順接仮定条件表現に見られる傾向について、2点触れておく。

一つは、「なら」による条件文の特殊性である。5.でも見たように、全国の多くの方言で、共通語の「ば」「たら」「と」「ては」が担う意味領域については、その間で共通の形式が現れることがあるが、「なら」が表す意味領域についてだけは、それらとは違った形式が当てられている。このことは、「未然形+バ」の意味の偏りという面にも反映している。この点、佐賀方言の「ギー」はその境界を越えた広い用法を持っており、きわめて特徴的であった。

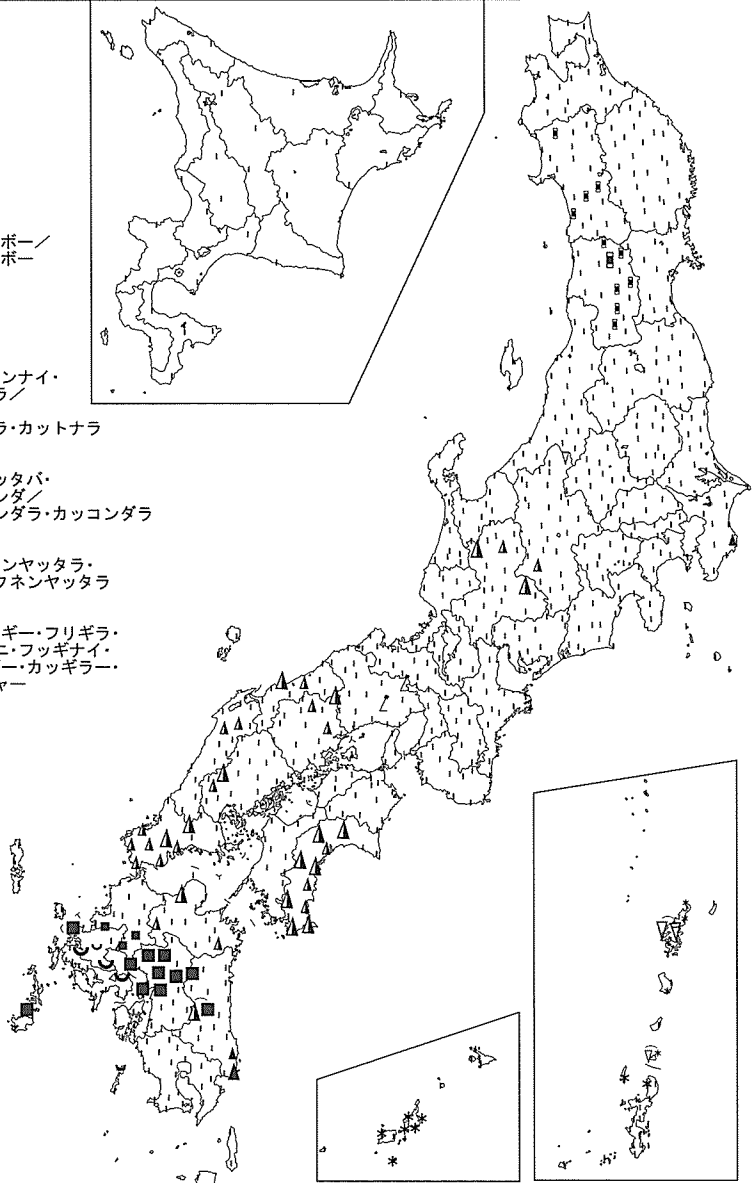
ただし、『方言文法全国地図』を再びよく見ると、「ば」「たら」「と」「ては」の意味領域（の一部）と「なら」の意味領域を、同一の形式が担っている可能性のある方言は、他にも見出される。図8として、167図「あした雨が降れば船は出ないだろう」と、133図「手紙を書くなら字をきれいに書いてくれ」との回答の一致の状況をプロットした。「完全一致」は両図の回答が全く同じこと、「一部一致」は両図に同じ語形も回答されているが、どちらかの図で別語形も併用されていることを示す。

この図から、「ギー」のほか、167図「降れば」に多く現れる形式では、「仮定形+バ」の融合形（-jaa 類：「フリヤー」、「カキヤー」）が、山口県を中心とした中国地方から大分県にかけてと

167「あした雨が降れば船は出ないだろう」と
 133「手紙を書くなら字をきれいに書いてくれ」
 の回答が同一形式の地点

完 一
 全 部
 一 致

- ▲ ▲ -eba 類
 フレバ／カケバ
- ▲ ▲ -jaa 類
 フリヤー・フリヤ／
 カキヤー・カキヤ
- ▽ ▽ -aba 類
 フラバ・フラバヤ・ブラポー／
 カカバ・カカバヤ・カカポー
- ▽ ▽ -uba 類
 フツバヤ・フツポー／
 カクバヤ・カクポー
- ■ (ン)ナラ類
 フルナラ・フンナラ・フンナイ・
 フルンナラ・フツナラ／
 カクナラ・カクナイバ・
 カクンナラ・カクトナラ・カットナラ
- ▣ ▣ ゴツタラ類
 フルゴツタラ・フルゴツタバ・
 フツゴンダラ・フツゴンダ／
 カグゴツタラ・カグゴンダラ・カクコンダラ
- △ △ ンヤツタラ類
 フルンヤツタラ／カクンヤツタラ・
 カクノンヤツタラ・カクネンヤツタラ
- ∪ ∪ ギー類
 フィギー・フーギー・フッキー・フリギラ・
 フルギット・フィギーニ・フッキナイ・
 フッキニヤ／カクギー・カクギラー・
 カクギーニ・カクギニヤ
- * * 上記以外で同一形式
 † 同一形式ではない



『方言文法全国地図』第133図と167図をもとに作図

図8 「降れば」と「書くなら」の回答が同一形式の地点

高知県、および、岐阜県と長野県の県境地域に見られ、133 図「書くなら」に多く現れる形式では、「ナラ」が九州北西部に、「ゴツタラ」が秋田県・山形県に、「未然形+バ」(-aba 類)が長野県秋山郷、八丈島、奄美大島に見られることがわかる。これらは、「ギー」ほどの用法の広が

りは持たず、他の区別のある形式と併用されているケースも多いが、例えば、「假定形+バ」の融合形が「なら」の意味領域を担っていると見られる方言については、従属節内のテンスの分化がどのようになっているか等、興味のあるところである。

二つめは、同一方言内での順接假定条件を担う形式の種類についてである。全国方言を見渡すと、津軽方言、佐賀方言を含め、順接假定条件表現を担う形式の数も意味用法の区別も、共通語と比べると少ない方言が目立ち、多い方言は稀であることに気づく¹²。条件表現形式が、前件と後件の論理的関係を担う文法要素であることを考え合わせると、このような表現は、書きことばを背景に持つ中央方言および共通語において分化発達する必要がある、専ら話しことばである方言では、未分化未発達、または整理統合に向かった、という見方ができるだろうか。別の表現分野での状況を踏まえながら考えてみたい。

7. 方言の文法体系の多様性の記述に向けて

方言の条件表現については、共時的に (1) 形式のバリエーションと分布の把握、(2) 特定の形式の意味用法の記述、(3) 特定の方言の体系の記述、を行うとともに、その上に立って各地方言の形式と体系を比較対照し (対照研究・類型論的研究) 変化を跡づける (言語変化研究)、という課題がある。そのためには、現代語研究、歴史的研究、そして方言の記述研究の成果を生かして、条件表現の体系を描き出すのに必要な観点を網羅した調査文を作成し、調査を行う必要がある¹³。

『方言文法全国地図』には、文法体系の多様性をうかがわせる例が豊富に見出せる。アスペクトや可能表現、一部の格表現のように、記述の枠組みがはっきりしており、諸方言の調査も進んで、研究が進展している分野がある一方、条件表現のように、ある程度の見通しが得られているという段階の分野、間投助詞のように、枠組みの設定の可否自体をこれから検討する必要のある分野など、研究の進み具合は様々である。現代語文法研究や日本語史研究と連携しながら、方言文法の対照的・類型論的研究を進めていくことは、今後の方言研究の一つの課題であると考えられる。

注

- 1 『方言文法全国地図』の概要は以下のとおり。1989～2006年刊行。全6集。350面の地図と解説書からなる。調査は、1979～1982年に、全国807地点で、臨地面接調査により実施。話者は、原則として、大正末年以前の生まれの生え抜きの男性、各地点1名ずつ。質問法は、共通語による調査文を提示し、「土地のことば」で何と回答をもらおう、共通語翻訳式。この調査の回答と地図化に関するデータはすべてHP上 (http://www2.kokken.go.jp/hogen/dp/dp_index.html) で公開されている (本稿の略図は、このHP上で公開されているデータとプログラムを利用して作成したものである)。なお、「特集：地図に見る方言文法」(『月刊言語』35-12, 2006.12)、『方言文法全国地図をめぐって』(『日本語学』26-11, 2007.9)には、この地図集の背景と性格に関する論考と、様々な角度からのケーススタディが収載されている。
- 2 以下の概観に際しては、日高(2003)の記述を参考にした。

- 3 ここでいう「周囲の分布」は分布パターンのことを指しており、必ずしも、中央が新しい形式で周辺部が古い形式を残す、という周囲論的解釈が全面的に成り立つということを意味しない。確かに、例えば、近畿方言でその周辺地域に比して「タラ」が広い用法で用いられることなどは、近世末から近代にかけてこの地域で進化した「タラ」への一本化という変化（金澤1998; 矢島2006等）を直接反映したものと見られる。また、以下で触れる事実的用法の「たら」の由来や、主として「なら」仮定条件文に現れる「未然形+ば」も、方言に過去の中央語の姿が残存していると考えるのが順当であろう。このように少なくとも個別には、中央語史の反映と推測される面は多々あるが、今は分布の指摘にとどめ、体系を視野に入れた歴史的解釈は今後に譲ることとしたい。なお、彦坂(2007: 324)は、本稿と重なる5枚の地図の分布を観察して、「詳細は今後のこと」としながら、大局的に「国語史の仮定条件の歴史にかなりよく対応している」とまとめている。
- 4 1998年3月に筆者が行った臨地調査の際に得た回答。
- 5 この理由は今のところ不明だが、矢島(2004)によると、近世中期以降の上方語における、「未然形+ば」の衰退過程でも、同様の段階があったことが示されており、注目される。
- 6 データは、1998年11月に筆者が行った臨地質問調査の結果による。話者は1930年代生まれの生え抜きの男女6名。別に、談話の録音文字化資料の調査によっても、同様の傾向が見られることがわかっている（三井1999）。なお、地名は調査時のもの。
- 7 ここで、表2で「タラ」が広い用法で用いられていることがうかがわれた、近畿から四国にかけての方言について、調査法の観点から触れておく。共通語の「たら」には、「ば」のような明らかな語用論的・文法的制限がない。そのため、同じく広い用法で用いられるとは言っても、津軽方言の「バ」と違って、この方言の「タラ」については、共通語では「たら」が使えない文で「タラ」が使える、といった形での違いは見出しにくい。この場合、共通語と当該方言の間の違いは、文法的適格性の判断という形ではなく、量的な傾向の違いとして把握することが有効である。真田(1989: 41-43)は、多人数へのアンケート調査という方法で、中井(2008: 142-168)は、大量の会話録音資料から収集した用例の分類・分析という方法で、量的な傾向として、この地域の方言における、他形式に対する「タラ」の優勢ぶりを、はっきりと捉えている。
- 8 データは、『方言文法全国地図』における佐賀県内6地点（伊万里市土井町、鹿島市古枝字下古枝、多久市西多久町板屋、佐賀市鍋島町蛸久、神崎郡三瀬村大字藤原字井手野、東松浦郡呼子町大字呼子字西中町：地名は調査時、以下同じ）の回答を中心とし、後述の『方言文法全国地図』準備調査、『全国方言談話データベース』所収の談話を援用した。日本放送協会編(1966)の談話や、神部(1992)、藤田(2003)等の記述も参照した。ただし臨地調査は未実施であり、今後、以下の内容を見通しとして、実地に精査する必要があると考えている。
- 9 「ギー」と「ナイバ」の使い分けが問題となる場合もあるが、今は考察が及ばない。有田・江口(2009)は、「調査の途中経過」としながら、従属節内のテンスの働きを中心に「ギー」と「ナイバ」の異同について考察しており、若年層における両形式の使用実態としても参考になる。なお、「ギー」には、「ギニャー」「ギニャワ」「ギナイ」「ギット」「ギンタ」「ギタウ」など多くの変異形があるが、ここで述べる範囲のことについては明らかな違いが見出されないの、以下ではすべてまとめて「ギー」として扱う。また、「ナイバ」には「ナイ」という変異形がある。
- 10 同地点では、関連項目を通じて「ギー」のみが回答され、「ナイバ」は回答されなかった。ただし、170図「行ったら」(図5)の回答は、「イタイバ」であったので、「ギー」の事実的用法

法の例(⑩)としては、後掲の準備調査の回答を示した。なお、準備調査のこの地点では、「ギー」が「なら」の意味領域でも使われることは同様だが、項目によっては「ナイバ」も回答されている。

- 11 例文②とともに、小西いずみ氏の御教示による。
- 12 八丈方言や琉球諸方言では、アスペクト、モダリティといった他の文法カテゴリーの関与があり、多様な形式が存在するようである(伊豆山2001;金田2001等)。
- 13 そのための調査票は三井(2002a)で作成したことがあり、本稿の津軽方言の調査はこの調査票によって行った。しかし、特に「なら」仮定条件文を担う形式に関する調査文が手薄であるなどの問題点もあり、個別方言の記述を進めながら補充を行っていく必要性を感じている。

参考文献

- 有田節子・江口正(2009)「佐賀市方言の条件表現:「ぎ／ない」を中心に」九州方言研究会第27回研究会発表資料
- 伊豆山敦子(2001)「琉球・八重山(石垣宮良)方言条件表現とアスペクト・モダリティ的側面」『マテシス・ユニヴェルサリス』2(2), 1-25
- 井上文子(2008)「日本語はここまでわかった:方言文法について」『日本語学』27(12), 52-63
- 金澤裕之(1998)『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 金田章宏(2001)『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院
- 狩俣繁久(2007)「宮古保良方言の条件形」『南島文化』29, 41-62
- 神部宏泰(1992)「第3章第2節 肥筑方言の仮定条件接続法」『九州方言の表現論的研究』, 142-156, 和泉書院
- 国立国語研究所(1963)『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所(1989)『方言文法全国地図解説』1, 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所(1993・1999・2002)『方言文法全国地図3・4・5』, 大蔵省印刷局・財務省印刷局(現, 国立印刷局)
- 国立国語研究所(2008)「I 佐賀県佐賀市」『全国方言談話データベース日本のふるとことば集成』19, 12-104, 国書刊行会
- 小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 真田信治(1989)『日本語のバリエーション』アルク
- 津波古敏子(1997)「琉球列島の言語(沖縄中南部方言)」『言語学大辞典セレクション:日本列島の言語』, 369-388
- 中井幸比古(2008)「京都方言の形態・文法・音韻(1) 一会話録音を資料として(1) 一」『方言・音声研究』1, 9-200
- 日本語記述文法研究会編(2008)「第11部複文第4章条件節」『現代日本語文法』6, 93-164, くろしお出版
- 日本放送協会編(1966)「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」『全国方言資料6:九州編』, 121-148, 日本放送出版協会
- 蓮沼昭子(1987)「条件文における日常的推論 一「テハ」と「バ」の選択要因をめぐって一」『国語学』150, 1-14
- 彦坂佳宣(2007)「仮定条件の全国分布とその特徴 一『方言文法全国地図』を資料として一」『こ

- とばの論文集 —安達隆一先生古稀記念論文集—, 310-325, おうふう
- 日高水穂 (1999) 「秋田方言の假定表現をめぐって —バ・タラ・タバ・タッキヤの意味記述と地域の標準語の実態—」『秋田大学教育文化学部紀要』54, 45-55
- 日高水穂 (2003) 「条件表現「すれば」「したら」「すると」」野田春美・日高水穂『現代日本語の文法的バリエーションに関する基礎的研究』, 81-94, 科学研究費補助金研究成果報告書
- 日高水穂 (2008) 「「そこに車をとめればダメです」—標準語と方言の意味のずれ—」『月刊言語』37 (15), 44-51
- 藤田勝良 (2003) 『日本のことばシリーズ 41: 佐賀県のことば』明治書院
- 方言文法研究会 (2007) 『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』科学研究費補助金研究成果報告書
- 前田直子 (1995) 「ば, と, たら, なら—假定条件を表す形式—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』, 483-495, くろしお出版
- 益岡隆志 (1993) 「日本語の条件表現について」『日本語の条件表現』, 1-20, くろしお出版
- 三井はるみ (1999) 「青森市方言の順接假定条件表現の形式と用法の整理 —録音文字化資料を用いた方言文法記述の試み—」『語彙・語法の新研究』, 320(左 115)-308(左 127), 明治書院
- 三井はるみ (2002a) 「条件表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』, 85-101, 科学研究費補助金研究成果報告書
- 三井はるみ (2002b) 「気づかない方言の方言学 —対照方言学的研究の出発点として—」日本方言研究会編『21 世紀の方言学』, 257-267, 国書刊行会
- 矢島正浩 (2004) 「条件表現における未然形+バの衰退 —近世期上方資料の使用状況から—」『国語国文学報』62, 90-74
- 矢島正浩 (2006) 「近代関西語の順接假定表現 —ナラからタラへの交代をめぐって—」『日本語科学』19, 77-97
- 『月刊言語』35(12) (2006) 「特集: 地図に見る方言文法」
- 『日本語学』26(11) (2007) 『臨時増刊号: 方言文法全国地図をめぐって』

付 記

本稿は、日本語学会 2008 年度春季大会シンポジウム「日本語の条件表現 — 体系と多様性をめぐって —」(2008 年 5 月 17 日, 於: 日本大学) における発題「条件表現の地理的変異」(『日本語学会 2008 年度春季大会予稿集』 pp.51-54) および、平成 20 年度国立国語研究所研究発表会 (2008 年 12 月 19 日, 於: 国立国語研究所) における口頭発表「方言の研究法 — 体系と多様性をめぐって —」(同予稿集 pp.15-28) に、加筆、修正を施したものである。

三井 はるみ (みつい はるみ)

国立国語研究所研究開発部門
190-8561 東京都立川市緑町 10-2
mitharu@kokken.go.jp